

「田舎の片隅に、人知れず建つ神社仏閣は、そういう点ではずっと生き生きしている。古美術のたぐいも、村人たちに大切にされて、安らかに息づいているように見える。油日神社は、私が思ったとおり、そういう社の一つであった」

これは、白洲正子「かくれ里」の冒頭に著された「油日の古面」中の一文です。

油日神社は、三重県境に近い甲賀市甲賀町油日に鎮座する古社で、いまも白洲正子が訪れた当時とか変わらず、「深い木立にかこまれ」、「しつとりと、落ち着きのあるたたずまい」の中にあり、中世にタイムスリップしたかのような趣すら感ぜられます。

社伝によると、神社の背後にそびえる油日岳頂上に岳大明神が降臨し、油の火のような大光明を発したため、油日の名が付いたといわれています。もとは、油日岳を奈良の三輪山に代表されるような神体山としてあげていたのでしょう。頂上には現在も奥宮

が祀られています。祭神は、油日岳を神とする岳大明神を主神としますが、この神様とともに水の神である罔家女命も祀られています。神体山である油日岳に源を發した油日川は、甲賀を貫く代表的な河川の一つ杣川となり、やがて琵琶湖へ注ぐことから、一緒に祀られるようになったのでしょうか。平安時代の史書『日本三大実録』元慶元年(877)に油日神に五位下を進階した記事が史上での初出となります。

白洲正子は、神社が所蔵する「福太夫」という室町時代の古面を求めてここを訪れたのですが、油日神社にはこの面のほかに、同じく「かくれ里」で紹介されている「ずいご像」をはじめ仏教絵画などの美術工芸品や、楼門とそれに続く回廊・拜殿・本殿などの建造物など室町時代か

油日神社



油日神社の楼門と回廊

ら桃山時代の文化財を数多く有しています。この時代こそ油日神社がもっとも輝いていた時代だったのです。

室町時代後期の甲賀郡には、郡全域を治めるような有力な領主は存在せず、小領主が割拠している状況でした。

そのため、甲賀郡には他地域に比べて城館の数が多く、県内1300カ所ほどある城館跡のうち、18%がこゝ甲賀郡にあります。

しかし、大規模な城館はみられず、いずれも中小規模であることが特徴です。これら

の小領主は「甲賀五十三家」と呼ばれ、同じ姓や同族を許された者どうしで「同名中惣」という地域連合の自治組織を作り、小地域の運営を行っていました。これを甲賀郡全域に拡大させたものを「甲賀郡中惣」と呼んでいます。甲賀郡中惣は、各同名中惣から選出された10人の奉行の合議制によって運営されていました。

この郡中惣最高議決機関を惣寄合といい、油日神社境内で開かれていたようです。天正14年(1586)には、甲賀郡中惣より永代神領として油日神社に百石を寄進したという記録も残っており、甲賀郡の総領守として甲賀武士から崇敬されていたことがうかがえます。

油日神社の周囲には、油日城跡や木内城跡、織田信長の有力家臣の一人、滝川一益の出身と伝えられる滝川城跡をはじめ多くの城館跡があります。ゆっくりと1日かけてこの「かくれ里」をめぐるてはいかがでしょうか。中世の面影とともに、甲賀武士の息吹を感じることができると

思います。
(財団法人滋賀県文化財保護協会 内田保之)

中世の面影あるたたずまい